

夢のつばさ♥プロジェクト 平成24年度 事業報告書

2012年4月1日～2013年3月31日

1. キャンプ

(1) 春キャンプ

【実施期間】2012年5月19日～20日

【開催地】岩手県遠野市・花巻市

【参加内訳】子ども49名、学生ボランティア28名（他団体を除く）、その他スタッフ8名（他団体を除く）

【主な内容】

5月19日	<牧場体験> 馬の餌やり・乗馬・蹄鉄投げゲームなど <キャンプ> テント張り・カレー作り・キャンプファイヤー
5月20日	夢のつばさプロジェクト／花巻青年会議所55周年記念事業・共催科学イベント ・川口淳一郎氏講演会、宇宙服・はやぶさ模型等の展示（協力：JAXA） ・子ども科学教室：ソーラーカー作り（協力：NEDO）

(2) 夏キャンプ

【実施期間】2012年7月31日～8月3日

【開催地】(株)ブリヂストン軽井沢保養所

【参加内訳】子ども16名（募集締切時20名）、学生ボランティア29名、スタッフその他14名

【主な内容】

7月31日	開会式、軽井沢散策、シャボン玉、花火
8月1日	ラジオ体操、朝の勉強会、佐久市子ども未来館見学、寸劇作りと発表会
8月2日	ラジオ体操、勉強会、自由研究をしよう（科学実験）、プチ運動会、アボリジニの楽器の演奏会
8月3日	閉会式、写真スライドショー、メッセージカードのプレゼント

(3) 冬キャンプ

【実施期間】2012年12月24日～27日

【開催地】(株)ブリヂストン軽井沢保養所

【参加内訳】子ども16名（募集締切時20名）、学生ボランティア31名、スタッフその他16名

【主な内容】

12月24日	開会式、軽井沢銀座散策
12月25日	朝の勉強会、クリスマスパーティ準備（飾り付け、クッキー作り）、クリスマスパーティ、サンタクロース登場、アカペラ音楽会
12月26日	勉強会、茶道体験、カルタとり大会、
12月27日	閉会式、写真スライドショー、保養所管理人へ子どもたちから感謝のカードプレゼント

(4) 2013年春のイベント

【実施日】2013年3月24日（学生の自主運営・日帰り）

【開催地】仙台市（仙台科学館、榴ヶ岡公園・敷地内の榴ヶ岡市民センター）

【参加内訳】子ども5名、保護者2名、学生ボランティア9名、スタッフ2名

【主な内容】午前：仙台市科学館の展示見学・体験。午後：榴ヶ岡公園・市民センター内でフリスビー、ドロケイ、シャボン玉遊びなど。市民センターではハンカチ落としなどで元気よく遊んだ。保護者2名と正副学生代表とスタッフが懇談。

2. その他事業

(1) 東北大震災孤児・遺児保護者との懇談会

【実施日】2012年5月19日

【実施場所】宮城県仙台市

【参加者】東北大震災孤児・遺児の保護者（孤児女子大伯母、孤児姉妹祖母、遺児男子母）、河野貴代美氏（元・お茶の水女子大学教授、心理カウンセラー、フェミニストカウンセリング）、関百合子氏（文部科学省初等中等教育局）、室伏きみ子、滝澤公子

【内容】震災後1年を経て、子どもたちが現在置かれている状況や保護者の方々が抱えている問題などについて、現在の保護者の方にお話を伺いたいと考え、懇談の会を企画した。また現地の学校にカウンセラーが配置されたり、各地に女性センター等も置かれたりして、各自治体でカウンセリング体制の構築がなされつつある中で、夢のつばさプロジェクトが、相談窓口を作ることへのニーズについても把握したいと考えた。

心理カウンセラーの河野貴代美 元・お茶大教授を中心に進行。一時の混乱状態を過ぎて、孤立感や将来への不安感を深めている方達へ寄り添うことが必要な時期に来ていると感じた。

お話を進めるうちに、「顔も気心もわかって信頼感が感じられる仲間による懇談会は、夢のつばさプロジェクトにふさわしい」、「今の状況では形の整った相談室を設けるより、却ってこのような会を続けていくことが有効かもしれない」という共通の想いに達した。次回を約束して散会。

（2）被災生徒訪問

【実施日】2012年7月7日

【実施場所】福島県

【参加者】東北大震災孤児男子中学生、夢のつばさボランティア大学生（お茶大生）、室伏擴、室伏きみ子、滝澤公子

【内容】「高校受験の勉強のため、2012年の夏キャンプに不参加」を通知してきた福島県在住の中学生をスタッフとボランティア学生が訪問。

この中学生は津波で両親や祖父母を亡くし、24歳の姉が面倒を見ている。2011年12月のキャンプでは、経済的な負担に心を痛めて進学をあきらめる発言をしており、スタッフたちは気にかけてきた。進学を決心したとの話に、夢のつばさの皆が応援していることを伝え、受験勉強をボランティア学生たちが支援する方策を探ろうと考えた。

地域の援助で週1回の家庭教師の訪問をうけているとのことで、勉強のための新しい関係を作ることにはならなかったが、中学生はこの訪問をととても喜び、訪問した学生を通して、その後も携帯メールで「夢のつばさ」とつながりを保っている。ボランティア学生・スタッフたちにとっても、この中学生が少しずつ生活に落ち着きを取り戻し、進学に意欲を持ったことを確認でき、元気な顔を見ることができたことはとてもうれしいことであった。

（3）第二回 東北大震災孤児・遺児保護者との懇談会

【実施日】2012年11月3日

【実施場所】宮城県仙台市

【参加者】東北大震災孤児・遺児の保護者（孤児女子大伯母、孤児姉妹祖母、孤児女子伯母、遺児姉妹母）、河野貴代美氏、室伏きみ子、滝澤公子

【内容】5月の第一回懇談会の際に参加者の方々と交した、半年後の再会の約束を果たすため、心理カウンセラーの河野貴代美氏、室伏きみ子、滝澤公子と保護者の方々の懇談会を行った。今回は、新しく2名の保護者がこの会に参加した。

震災から1年半が過ぎ、少しずつ復興が始まっているとの報道もあるが、複雑な人間関係の軋轢の中で過ごされていることが分かった。被災地域の中で、「自分たちが不公平な状況に置かれているのではないか」「復興で格差が広がっているのではないか」という不満・焦燥感がくすぶっていることが感じられた。ある程度離れた立場から支援する夢のつばさのスタッフとの懇談は、利害なくお話を伺えるという意味で、ストレス解消にも役立つのではないかと感じた。

また子ども自身も、学校の仲間内で、ひとり親となった自分の境遇を打ち明けられないなどの葛藤を抱えている様子もうかがえた。このような子どもが置かれている状況の聞き取りは、キャンプでの活動にとっても有益な情報となる。数日のキャンプで積極的な介入をすべきとは考えては

いないが、それぞれの子どもが持つ問題にきめ細かに配慮しながら接していきたい。子どもが夢のつばさの仲間を得て成長することをゆっくりと待ちたいと考えている。

この懇談会は、特に、優れた心理カウンセラーであり、フェミニストカウンセリングの経験の長い河野貴代美氏のお力により、非常に有効に機能している。今後も継続していきたいと考えている。

（4）ボランティア学生の自主活動

ボランティア学生は、スタッフとの連携の下、平時は月1～2回、キャンプ前は毎週1回、お茶の水女子大学内で会合を開いている。「傷ついた子どもとどのように関わるか」など、心理カウンセラー（ボランティア）や子どもの発達を専門とする大学教員らとの勉強会も続けてきた。本活動の2年を経て顕著な成長を見せ、「子どもを受け入れるのと、要求を何でも聞き入れるのとはちがう。きちんと躡けたい時にどうしたらいいか」ということを問題意識として持つようになって、子どもとの活動を行う他団体や企業に積極的に学ぶ姿勢を見せている。

また広報や活動資金獲得に対しても関心を持ち、自主的な募金活動も行った（2012年7月：有志が地域の商店街のお祭りに参加。12月：市民マラソンの手伝いを兼ねて広報活動）。さらに、これまで参加した子どもたちと、日常的にどのような関わりができるかを模索している。前記（2）の受験生に、受験直前に送る応援メッセージを集めることや、スカイプ（ビデオ通話）による誕生日祝い（中学生以上）を送ることなどについても現在検討中。

3. 総括

夢のつばさプロジェクトは、2012年度、新たに団体14組、個人79組からご寄付をいただいた。

東北各地の教育委員会や児童家庭課等へのアプローチも重ね、「地味ではあるが、じっくりと子どもに向き合い、長期にわたってきめ細かな支援を行う信頼できるイベント」として認められている。2012年度は、夏、冬のキャンプ活動に20名の募集人数を超える応募が集まって、お断りする状況になった。教育委員会や支援者の方々へきちんと事後報告するなどの努力も続けている。

キャンプ活動では、音楽会を催したり、体を動かしたり、社会見学を行ったり、幅広い活動を実施することに努めている。科学・理科教育経験の豊富なスタッフによる様々な体験プログラムも用意している。参加した子どもたちの満足度はとても高く、次の回も、学校行事等がない限りほぼ応募して来る状況である。2年目に入り、子どもたちも当初の堅い表情が和らぎ、人を拒絶するような態度がほぐれて、ボランティアの学生や大人に素直に甘えることが多くなった。中学生の男子までが楽しそうに学生達となじんでいる様子を見ると、幼い子どもから思春期を迎えた生徒まで、このキャンプが貴重な安らぎと成長の場になっていることが感じられる。

また子どもを健やかに育てるためには、毎日接する保護者の心理的安定が大切なことは論を待たない。2012年度は2回の懇談会を行って、ひとり親となった保護者や、急に子どもを引き取ることになった保護者を、本プロジェクトで支援することが必要かどうか検討を行った。いまだに不安と軋轢のなかで暮らしていることが分かり、心理カウンセラーを含めた検討の結果、夢のつばさプロジェクトのスタッフと保護者の気おけない話し合いの場を設けることが、整備された相談窓口を設けるより、現状では有効であろうとの結論となっている。

夢のつばさプロジェクトの活動に参加する学生も頼もしく成長している。このプロジェクトが孤児・遺児だけでなく、学生の成長をも顕著に促していることは、当初予想していなかった嬉しい成果である。学生が大人の支援者に対応する中で「自身が企画立案したことを相手に敬意を持って説明して、自分たちに協力を仰ぐ」という作業や、子どもたちに対して、「遊びに対する子どもの反応を想像して計画し、実地に修正しつつ遂行する、次に活かす」などの作業を行うことが、チャレンジングであり、また学生自身に大きな達成感を与えている。こうした喜びを知った学生が、次の学年を育てようという意欲を見せており、今後が楽しみなプロジェクトになってきている。